

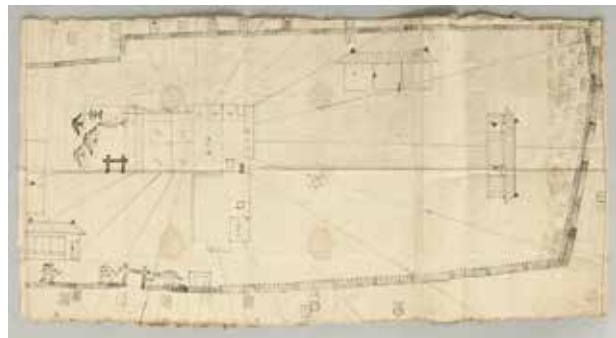
那珂川の水運

歴史民俗資料館に見学に来た小学生に、「今、税金はお金で払っているけど、江戸時代の農村は何で払っていたのでしょうか?」と聞くと、ほぼ「小判!」と返ってきます。「う〜ん……。小判とかのお金って昔の農村の人は持っていないんだよね」と言うと、やっと「お米」と返ってきます。

さて、その米はどうやって運ばれたのでしょうか。馬による陸送ではあまり量を運べません。そこで活躍したのが、本市を流れる那珂川と久慈川を利用した水運です。しかし、久慈川は水戸には流れていません。太子方面からのお米や荷物は、久慈川から那珂川に移し替えられます。そして、その重要な役を担ったのが「河岸」と呼ばれる水運業、廻船問屋です。久慈川の山方河岸、高渡(高和田)河岸で荷上げされた荷物はそれぞれに陸送され、那珂川の小野河岸に運ばれます。そのルートは、山方河岸は山方地区寄りの野上地区を通り、東野地区を経て、小野地区と三美地区の境にある三ノ八峠を越え、小野河岸に運ばれます。高渡河岸に上がった荷は、玉川橋を越え、若林地区の引田を通過して小野河岸に運ばれます。

小野地区には最初、上・中・下と3つの河岸がありましたが、その後中河岸と下河岸が合併し、下河岸となり昭和初期まで残りました。

さて、舟一艘には、どのくらいの米が積めたのでしょうか。一艘で約90俵あまりの米が積めたようです。1俵は四斗四升入(約60kg余)なので、5t以上積んで下って行ったことになります。水戸まで下って行くのに、風があれば、帆をかけるので2〜3時間、風が少ない時は、手こぎで4時間くらい、上りは順風の時で3〜4時間、舟に縄をつけ河原を人や馬が引いて上る縄上げだと、12時間近くかかったそうです。



▲小野宇留野家の敷地を描いた家相図

ここに河岸問屋を営んでいた家の家相図があります。厩^{うまや}があり主家以外にも人が住むところがあります。今で言う、従業員宿舎がありました。蔵は川近くに3棟ほどあったので、ここの蔵は貴重なものを置くためのものと考えられます。

また、この家に当時から本膳に使われている漆器膳とお椀があり、写真のように、屋号(上河岸)と、帆かけの焼き判が見られます。



▲小野河岸の焼き判が入った膳と屋号が入ったお椀

なお、河岸で扱っていたものは、米のほかに奥州の茶などもあり、また、たばこやこんにゃく、紙・木材なども扱っていたようですが、陸運の発達とともに衰退し廃業となっており、現在は、その当時の面影がわずかに残っているだけとなっています。



▲小野下河岸の舟をつないだとされるケヤキ

【参考図書】

大宮町史、常陸大宮市史資料編 4

(歴史民俗資料館 宇留野美雪)